

# 南アフリカフェミニズムの行方

## 新生南アにおける黒人フェミニストの挑戦

黒枝一代

### はじめに

1990年のネルソン・マンデラ釈放以降、南アフリカ（以下、南ア）のフェミニズムは新生南アにおける新しい方向性を見いだすための重要な岐路に立たされている。多くの反アパルトヘイト運動グループが多数支配以降後における自らの立場と指針を模索しているなかで、フェミニズム運動も新生南アにおけるフェミニズムの立場と方向性を再考して、南アフリカの多様性を考慮に入れた理論構築を行なおうと試みている。

従来南アフリカにおいては社会主義フェミニズムとラディカル・フェミニズムの二つが南アフェミニズム理論の支柱をなし、主に南アの白人の学者たちによって支持され議論されてきた。アパルトヘイト廃止以後、黒人女性はこの二つの理論は南ア黒人女性の状況を真に理解するには限界があるとし、南ア黒人女性のための新しい理論を構築しようとしている。

本稿は1992年以降『アジェンダ』誌に掲載された3人の黒人フェミニストと二人の白人フェミニストの間で交わされたフェミニズム議論を紹介し、特に黒人フェミニストたちの新しい理論構築の試みについて分析を行なうものである。

### 1 白人女性と黒人女性について 語ることができるのか？

南アフリカには女性に関する問題を扱う専門誌がいくつかある。なかでも『アジェンダ』誌は多岐にわたる問題をさまざまな立場の女性が分析し討論することで、人種、階級、宗教、セクシュアリティ等の違いを超えて、幅広い読者層を獲得している。1992年以来アジェンダ誌は、アパルトヘイト以後も根強く南ア女性の間に残る政治的、経済的、社会的違いに焦点をあてている。そのきっかけとなったのは、『アジェンダ』15号（1992年）に掲載された南アの黒人弁護士、ルムカ・フナニの論文「ナイジェリア会議再訪」である。

フナニの論文の題材となったナイジェリア会議は1992年7月に開催され、アフリカ内外に住むアフリカ人女性の問題について討論が行なわれた。その会議で、あるアフリカ系アメリカ人女性が「人種、階級の違う白人女性が黒人女性の経験について論文を発表するのは妥当か」という疑問を投げかけた。フナニはその回答として「白人女性は黒人女性の会議から排除されるべきである。なぜなら他者が黒人女性の現実について論ずる前に黒人女性自身が自らの現実について語る必要があるか

らである」と述べている。

## 2 フナニへの批判

このフナニの論文はフェミニストたちの間で多くの議論を醸し出した。まず初めにフナニに反論を寄せたのはナタール大学哲学科の白人講師、フィデラ・フーシェである。『アジェンダ』16号においてフーシェは、白人女性研究者の中には黒人女性の状況を発表する際、深い洞察や繊細さに欠ける者が多いと改めて指摘する一方、黒人女性の経験を代弁者として語る作業を行ってきた白人研究者もいると主張している。その例としてフーシェはヘレン・ジョセフやジャクリン・コックなど著名な白人研究者の、黒人女性についての作品を挙げ、これらには、アパルトヘイト下にありながらも黒人女性と白人女性の間には築かれた友好関係と尊敬の念が見受けられると述べている。

フーシェは、フナニの論文では人種の枠組みに執着しすぎるあまり黒人女性の間にもみられる階級の差について語られていないと批判する。同じ人種に属していても階級の差は歴然として存在しているという事実を見つめることなく女性の状況を理解するのは非常に困難であると述べる。フーシェはしたがって、自分とは違う状況に置かれた女性を完全に理解するのは不可能としても、その違いを理解する第一歩として、「人種、階級、ジェンダー」という女性を取り巻く三重抑圧構造を解明することからお互いの「違い」を認識してゆく作業が必要であると述べている。

## 3 フナニの反論

『アジェンダ』17号にはフーシェの批判に対するフナニの反論が載せられている。この号におい

てフナニは再度ジェンダーと人種問題を中心に議論を展開している。フナニはフーシェの指摘したヘレン・ジョセフやジャクリン・コックといった白人女性の作品は、彼女たち自身の白人性を返上し、アパルトヘイト下において危険な状況に身を置きながら黒人女性とともに共闘してきた点において評価できると言う。だがフナニは、フーシェがそうした白人女性のことをここでの議論において引用するのは「フーシェ自身のいい加減な論点を支えるための弱々しく哀れな試みにすぎない」(p.56)と激しく批判する。さらに続けて、フーシェが投げかけた階級の問題についてもフナニは真っ向から否定している。彼女は、50人の黒人女性に「階級の差が黒人女性の連帯を阻むものであるか？」という質問を投げかけたところ、50人全員がそれはありえないと答えたと報告している。彼女はここで、ある著名な研究者で作家でもある黒人女性の言葉を引用して、黒人女性の間にある階級差を問うことで白人は黒人をわなにはめ黒人を分裂させようとしていると糾弾している。もし白人研究者が黒人女性を助けたいと思うなら白人自身を解放する努力をすべきだと結んでいる。

## 4 ハウスのフナニに対する批判

フナニとフーシェの間で繰り広げられたこうした一連の議論に対し、『アジェンダ』19号においてはステレンボッシュ大学政治学科の白人講師であるアマンド・ハウスがフナニ批判を行なっている。ハウスはフナニの白人に対する怒りは見当違いであって、この誌上討論の真意をねじ曲げるものだとフナニを批判する。フーシェと同じくハウスは、女性を抑圧する構造は人種、ジェンダー、階級を基本とし、その三重抑圧構造が交錯しているがゆえに女性を取り巻く問題については丹念な調査が

なされるべきだとする。彼女はここでの論点を大きく二つに分け、第1に白人女性が黒人女性のために代弁することができるのか、第2に白人女性と黒人女性は連帯することが可能なのか、というこの二点について議論を展開している。彼女はアメリカのフェミニスト思想家のサンドラ・ハーディングを引用し、研究者が研究対象者と同じ状況に身を置き調査を行なったものはその研究対象者に貢献するものであるという（ただしハーディングは男性が女性の経験について語ることができるのかという点について述べている）。問題が的確に分析され、概念や仮定の想定、調査計画、情報収集、データの解釈が、研究者自身の階級、人種、ジェンダーによって歪められることなく、研究対象者の状況が的確に語られている場合、研究者と研究対象者は互いの相違を超えて連帯することができるとする。

またフーシェが指摘した階級の問題についてハウスは、何人かの黒人フェミニストたちは階級を抑圧構造の一つと考えることによって白人フェミニストのブルジョワ性を批判してきたと指摘し、人種、階級、ジェンダーの三重抑圧構造は黒人女性にとって対峙しなければならない重要な要素であると結論づけている。

## 5 ヘンドリックスとルイスによる新しい試み

これに対し『アジェンダ』20号においては、ウェスタンケープ大学政治学科の黒人講師シェリル・ヘンドリックスと英語学科黒人講師デズリー・ルイスが、1980年代以降の第二波フェミニズムについて精緻な分析を行なって、この一連の議論に新しい視点を投げかけた。ヘンドリックスとルイスは近年黒人および第三世界に住むフェミニストの間で盛んに議論されているポストコロニアル理論

に注目し、南アでの可能性について模索している。

第一波フェミニズムとは1970年代のヨーロッパおよびアメリカにおける白人中産階級女性を中心としたフェミニズムを指す。第一波フェミニズムは「父権性」を女性に対する社会の普遍的な抑圧構造ととらえる。その普遍的抑圧に対して、「シスターフッド」の名のもとにすべての女性は結集し立ち上がるべきだと連帯を呼びかけるものである。80年代に入るとアフリカ系アメリカ人や第三世界の女性を中心に第一波の理論の限界を問う動きが現われ、さまざまな理論構築がなされてきた。ヘンドリックスとルイスは第二波の特に黒人フェミニストの理論構築の道程を追うことで、それぞれの理論の南ア黒人女性への影響と限界について論じている（ここで紹介されているのはブラック・フェミニズム、ウーマニズム、アフリカン・フェミニズム、デコンストラクション、ポストコロニアル理論の五つである）。こうした黒人フェミニストの動きのなかでも、最近特に注目されているのはポストコロニアル理論である。この理論はデコンストラクション理論の影響を受けながら、特に「黒人女性」あるいは「第三世界の女性」という枠組みから、ジェンダーと人種差別、ヨーロッパ中心主義、帝国主義を批判している。ポストコロニアル理論が他のフェミニズムと大きく違っている点は、既成のフェミニズムのように「父権性」や「人種、階級、ジェンダー」をもって女性に対する抑圧構造の固定化された枠組みだと措定したりはせずに、むしろ、女性差別の形態は流動的で複雑な力関係において発現していると考えた。したがって各々の性的、社会的形態を認識し（ポストコロニアル理論ではこの認識のことを「ジェンダーアイデンティティの確立」という。例えば「黒人女性であること」や白人中産階級でアメリカ南部出身の女性である」ということをはっきりと認識することを意味する）、それ

ぞれが多様なフェミニズムのゴールを設けるべきだとする。

ヘンドリックスとルイスは自らのジェンダーアイデンティティーの基本に黒人女性という枠組みを置き、ジェンダーと人種問題の観点から発言を行なっている。彼女らは、ハウスが「見当違い」と拒絶したフナニの怒りは、黒人女性にとって最も重要な問題である白人至上主義に対する怒りであるという。南アフリカにおいては多くの白人フェミニストたちが黒人の白人至上主義に対する批判を聞く耳を持っていないし、ハウスもまたフナニによって投げかけられたこの問題への回答を避けていると指摘している。特にヘンドリックスとルイスが問題にしているのは、フーシェもハウスも共に人権問題は黒人にとっての問題としてのみ受けとめ、白人にとっての問題として受けとめていないという点である。すべての南アフリカ人は、政治的、経済的、文化的な白人至上主義が残した構造的遺産に身をおいているという事実を、ハウスもフーシェも認識していないと批判している。白人研究者の問題点は彼らが特権階級に属し、周辺化された人々との間の不公平さを理解していない点にあるという。ヘンドリックスとルイスはアメリカの白人フェミニストであるアン・ルソーの「(白人にとって)人種差別の問題はあたかも彼らの問題であって、これらの女性(黒人女性)を助けることが白人の役目であるかのように思っている。白人至上主義に注目することは人種差別を白人の問題であるとみなすことである」(p.73)という言葉を用いている。そして、白人研究者が既存の力関係において自らのジェンダーアイデンティティーをはっきりと示さないかぎり、他者に

ついて語ることは不可能だとしている。ヘンドリックスとルイスはさらに続けて、「黒人女性」という枠組みの中においても階級や地域的違いが存在することを黒人フェミニストたちは忘れてはならないと警告している。黒人女性の間のこうした違いを認めないことは無責任であり、かつ非生産的であるという。ゆえに問題は、誰がどの女性の問題について語るかということではなく、フェミニストたちが自分自身と異なる他者についていかに語るかということであると指摘している。

## 結 び

この一連の議論を見ても明らかなように、新生南アにおけるフェミニズムの方向性は、ある一定方向に向かうのではなく、むしろ除々にその多様性を認めそれぞれが新しい出発点とゴールを設定しようとする傾向にある。ヘンドリックスとルイスが指摘した「他者についていかに語るか」という問題については、アパルトヘイト法廃止以後フェミニストたちだけに限らず多くの研究者の間で盛んに行なわれている議論の一つである。実際南アフリカにおいては、他者について語るという具体的な方法論についてはまだまだ開発途上であり、他者について語る難しさを認識しきれていないと、ルイスは別の論文において論じている。自らのジェンダーアイデンティティーを確立し他者との違いを認識する作業から、この複雑な南アフリカの女性の状況を理解するカギをフェミニストたちは見つけようとしている。

(くろえだ・かずよ/ウェスタンケープ大学大学院)